

茶における秋整枝時期早期化の検証

～収量・品質の向上に向けて～

上畠茜（豊田加茂農林水産事務所農業改良普及課）

【2025年12月掲載】

【要約】

茶の収量・品質の向上に向け、試験的に秋整枝を早め、霜害のリスクや増収・品質向上効果を検証した。今回の試験では、秋整枝時期を早めても霜害のリスクは低く、増収・品質向上効果を期待できることが確認できた。ただし、例年では秋整枝適期(平均気温が18°C以下になった頃)は10月中下旬だが、2024年は秋の気温が下がらず、11月上中旬であった。これにより、慣行区との差が小さくなっていると思われたため、引き続き検証が必要である。

1 はじめに（目的）

一般的に、秋整枝を早く行うと一番茶で霜害が発生するリスクが高まるが、遅く行うと一番茶の収量や品質が優れないと言われている。しかし、豊田地域では再萌芽、霜害などのリスク回避のため、慣行の秋整枝時期が11月中下旬と適期よりも遅い。そこで、試験的に秋整枝を早めて慣行と収量品質を比較した。

2 展示概要、調査方法

調査品種は「やぶきた」または「さみどり」で、豊田市平坦部の茶園で実施した。秋整枝は、試験区が11/4～11/6、慣行区は11/12～11/29を行った。

施肥、病害虫防除、被覆日数は各農家の慣行の方法で行った。

霜害のリスクを確認するため、再萌芽率、萌芽期を調査した(再萌芽率は1/22～2/6に調査した)。さらに、増収・品質向上効果を確認するため、摘採適期に各区で20cm×20cm枠3か所で枠摘みして新芽重、新芽数、出開き度、新芽長、開葉数、葉厚、含水率を計測した。

3 結果

(1) 霜害のリスク

各区の再萌芽率、萌芽期を表1に示した。萌芽期は試験区が慣行区より0～2日早くなかった。再萌芽はほとんどなく、わずかに再萌芽した芽は秋整枝で刃がかかる位置にある「頂芽」であった。また、秋整枝面の高さの違いを解消するため3/18にNo.5を整枝した。これに伴い、No.5、No.6の試験は途中で終了とした。

表1 再萌芽率、萌芽期

No	農家	区	秋整枝日	再萌芽率	萌芽期	品種
1	M 氏	試験区	11/5	0.0%	4/5	やぶきた
2		慣行区	11/19	0.0%	4/7	
3		試験区	11/5	0.0%	4/11	さみどり
4		慣行区	11/19	0.0%	4/11	
5	S 氏	試験区	11/6	3.0%		やぶきた
6		慣行区	11/12	4.5%		
7	K 氏	試験区	11/4	0.0%	4/6	さみどり
8		慣行区	11/29	0.0%	4/8	

(2) 増収効果

調査結果を図1～5、表2に示した。新芽重、新芽数は試験区の方が慣行区より優れた。新芽重から荒茶収量を推定したところ、試験区は146kg/10aで慣行区対比107%であった(表2)。また、試験区の新芽長は慣行区よりやや長く、開葉数も試験区の方が多い傾向であった。

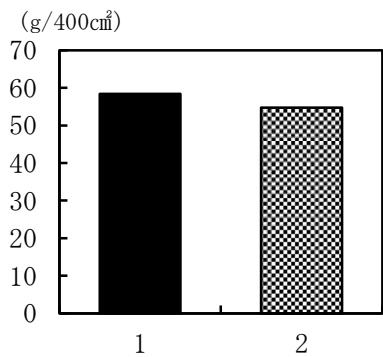


図1 新芽重

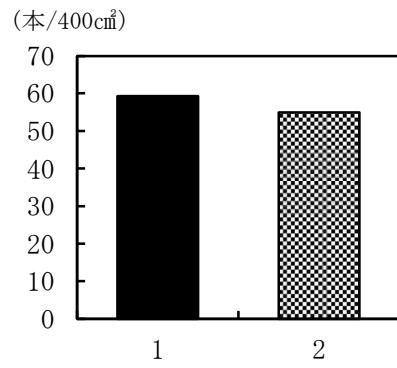


図2 新芽数

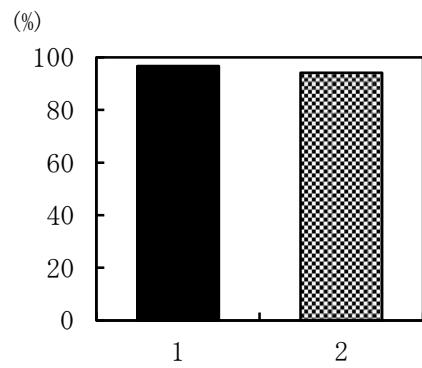


図3 出開き度

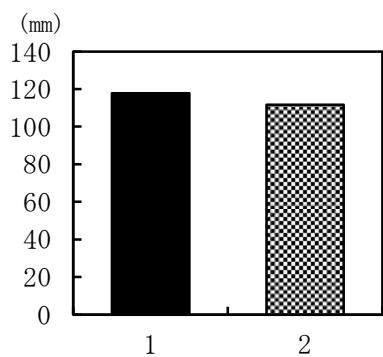


図4 新芽長

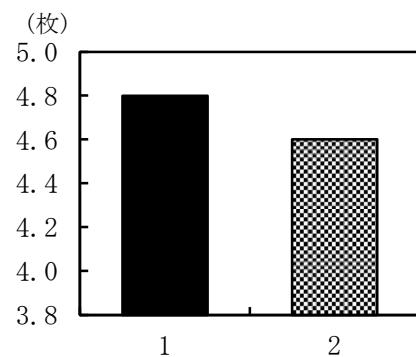


図5 開葉数

表2 試験区と慣行区の荒茶収量

区	荒茶収量	慣行区対比
試験区	146kg/10a	107%
慣行区	137kg/10a	—

(3) 品質向上効果

試験区の方が葉厚が薄く、含水率がやや高かった(図6、7)。葉厚、含水率から総合的にみた品質は慣行区と同程度以上であった。

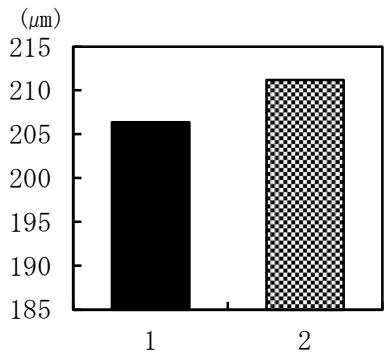


図6 葉厚

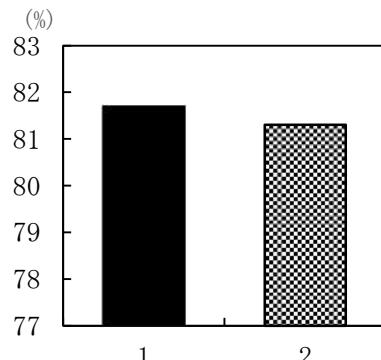


図7 含水率

4まとめ（考察）

今回の試験の範囲内であれば秋整枝を早めても再萌芽は0またはわずかであったことから、霜害のリスクが少なく、秋整枝を早めても翌一番茶への悪影響はないと考えられた。また、適期に秋整枝することで、秋整枝後に腋芽を充実させることができ、各新芽の伸びが良くなり、2節目や3節目の新芽も摘採刃にかかるため、增收効果が期待できると考えられた。さらに、腋芽が充実すると内包する幼葉の総数が増えることから、開葉数が増え、出開き(全ての幼葉が展開した状態)や硬化が遅れ、品質向上効果が期待できる。

ただし、例年の秋整枝適期は10月中下旬だが、2024年は秋の気温が下がらず、11月上旬に秋整枝を実施した。これにより、試験区と慣行区との差が小さかったと考えられた。そのため、豊田地域で例年の秋整枝適期に秋整枝を行うことは、霜害のリスクを高めるが、增收・品質向上効果は高まると考えられるため、引き続き検証が必要である。